

## 地域で具現化する－黒松内町の取組

黒松内町環境政策課 上席主幹 高橋 興世

### はじめに

黒松内町は1989年に「ブナ北限の里づくり構想」を策定し、地域に守られてきた豊かな自然環境を活用して都市と農村の交流事業を推進することにより地域活性化を目指すことを決めた。今から20年以上前のバブル景気末期において過疎化と少子高齢化が進む農山漁村の地域活性化策といえばリゾート開発や企業誘致等が主流であったなかで、黒松内町の示した方針は異端視されることはあっても、当時はあまり注目されることは無かったようである。

構想に基づき様々な施策が講じられてきた。1991年には自然体験学習宿泊施設が完成し、追って1993年に特産物手づくり加工センター、博物館的施設、キャンプ場などが整備されたことで、これら「交流施設」を活用した都市住民を受け入れる取組が本格化した。その後、温泉施設や道の駅等の交流施設も追加整備され、町外からの来訪者の受け入れ環境が充実していった。

これらのいわゆるハード整備を実施する際にも、「ブナ北限の里づくり構想」が一貫して有効に働くことによって、地域全体に統一感のある雰囲気醸成されている。また、それぞれの交流施設の事業活動内容は構想の中に描かれた個別の役割を分担することで、重なり合うことなく効率的に構想を具体化することとなった。

ハード整備と平行して、都市住民を地域に誘導するための様々なソフト事業が展開されてきた。ブナの森や朱太川の生きもの、歌才湿原、瀬棚層の化石などを活用する体験型環境教育を提供することで小中学校の受け入れや教職員研修、さらに有料の宿泊ツアー等を展開した。

また、地元の小学生を対象とした体験プログラムを毎月実施することで、地域に眠っている素晴らしい素材を発掘し、新たなプログラムの開発を積み重ねてきた。朱太川の鮎や蛙の生態を学び、森の恵みを自ら探して食し、地場で生産された大豆から豆腐を加工するといった、多様な試行的プログラムが実施されてきた。これらは今風に表現すると健全な生物多様性に支えられた黒松内町の様々な生態系サービスを実験するための子ども向けプログラムであったと言える。

1992年には生物多様性条約が締結されたが「生物多様性」という言葉は現在よりも一般社会に浸透していなかった。本町においても、「生物多様性」という単語がキーワードとして各種施策に用いられることはなかったが、あるがままの豊かな自然を保全しつつ持続可能な利用による地域活性化を進めるという本町のブナ里構想の方向性は生物多様性条約のそれを先取りするものであった。

### 黒松内町の生物多様性

黒松内低地帯はブナを含む冷温帯落葉広葉樹林帯と針広混交林帯の境界であることは広く認識されている。2

種類の異なる森林生態系の境界であるため、それぞれの森林環境について比較的容易に実体感できることも地域の大きな特性である。

黒松内低地帯が流域となる朱太川は、噴火湾近傍の源流から寿都湾に注ぐ河口まで、人工横断構造物が無いため、通し回遊生物を含む水生生物が本来の生活環を維持し健全に生息している。カワシンジュガイの貝礁も下流域から上流域まで多数確認され、世代交代も順調に進んでいることも確認された。他にも最終氷期最寒冷期から現在までの泥炭層が形成する歌才湿原など、黒松内低地帯には多様な生態系に溢れている。一見しただけでは目立った面白みも、驚きも、容易には感じられない事柄が多いため、かつては何もない地域との印象を与えてきた黒松内町ではあるが、生物多様性の観点から現状を捉え直してみると、極めて豊かで健全なエリアであることが少しずつ明らかになってきた。

しかしながら、地域全体の生物多様性に関する情報はまだ不十分な面が多々あり、分野によっては未だ全くの手つかずの状況にある。地域の自然環境等についての科学的な知見を得るために、野外調査等で来町する様々な分野の研究者との人脈を構築し、そこで得られた最新の研究成果の提供を受けてきた。この様な取組を制度化したのが1995年から実施している自然科学奨励事業である。研究計画を公募し、採択された研究計画に対して町が研究助成金を提供することで、新たな研究成果を安定的に収集することが可能となった。また、この事業以外にも大学院生等の調査活動支援するため滞在施設を提供し、研究成果の提供を受けるなど、様々な機会を活用した自然科学情報の収集に勤めてきた。

さらに、町の委託調査として歌才湿原植生調査、朱太川鮎生息状況調査等を実施することで、情報不足を補完してきた。このような地道な活動を約20年来継続することで、徐々にではあるが黒松内低地帯に関する多様な学問領域の情報が充実してきた。

### 近年の取組

近年では東京大学鷺谷いづみ教授の研究室との連携が強まり、大学院生や学生の研究フィールドとして利用される機会が増加している。さらに生物多様性に関する分野横断的プロジェクト研究(GRENE 流域レジリエンス 朱太川)、国際的な里山研究プロジェクト(JAGUAR)などの研究フィールドとしても地域全体が活用されている。

2012年3月に2年間の検討期間を経て、黒松内町生物多様性地域戦略を策定した。1997年に策定された黒松内町環境基本計画に新たに生物多様性の観点を導入し再構築することで森・里・川・海の繋がりを再整理し、生物多様性の維持に資する土地利用構想を示した。

2012年、本町が発起人となり後志地域生物多様性協議

